

立教大学ボランティアセンター 20周年記念企画
上映会 & 監督講演・アフタートーク

ただいま、
つなかん

宮城県気仙沼市唐桑半島
3・11からコロナ禍まで
たくさん笑って たくさん泣いて
こころを紡ぐ「民宿「つなかん」」の物語



語り: 渡辺 謙 | 監督: 風間 研一 | 音楽: 岡本 優子

ゼネラルプロデューサー: 斎藤隆平 | プロデューサー: 柴崎木綿子 | 編集: 井上秀所
配給宣伝協力: ウッキー・プロダクション | 宣伝協力: リガード | 制作著作: 文化工房 ©2023 bunkakobo
2023年 | 115分 | 16:9 | カラー | DCP | 日本 | ドキュメンタリー
<https://tuna-kan.com> 文化工房

※文部科学省選定(青年向き・成人向き)

後援: 宮城県 | 気仙沼市 | 気仙沼商工会議所 | 気仙沼市観光協会 |

仙台国際空港

LEX

U-100

文化工房



2023年12月9日(土)
14時~17時10分



立教大学 池袋キャンパス
マキムホールM301教室

お申し込みはこちらから

主催: 立教大学ボランティアセンター ✉ volunteer@rikkyo.ac.jp

立教大学ボランティアセンター設立20周年記念
映画「ただいま、つなかん」上映会&監督講演・アフタートーク(採録)

■監督講演

風間 研一(映画監督)

「ただいま、つなかん」監督の風間です。本日はご来場いただきましてありがとうございます。ボランティアセンターの20周年記念というタイミングで上映会を開いていただきまして、本当に嬉しく思っております。改めてありがとうございます。20周年おめでとうございます。

私は2001年に理学部化学科を卒業し、22年経ちましてこうしてやってきました。これは、今年の2月25日に撮影した写真です。「ポレポレ東中野」という映画館での上映初日に根岸えまさんと撮っています。初日はえまさんと2人でトークショーをしまして、おかげさまで満席だったんですけども、その時の記念に撮らせていただきました。

えまさんを知っている方もいらっしゃるかと思いますが、2015年に社会学部社会学科を卒業した立教大学の卒業生でもあります。そんな立教卒業生が作って卒業生が出演した、そんな映画となっております。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は1977年に神奈川県横浜市に生まれました。もうすぐ46歳です。1996年に神奈川県の柏陽高校を卒業し、97年に立教大学の理学部化学科に入学しました。今日も同級生が来ているのですが、多分僕が映像の仕事をするということは想像つかなかったと思います。自分でも思っていないんですけど。

高校の同級生とのバンド活動を通してものづくりというか、クリエイティブな何かをつくって

いく仕事とといいますか、生み出していく仕事をやりたいと思っていました。メディアの仕事をしたいなとは思っていたのですが、就職活動に失敗しまして、卒業後には一旦、化学系の専門商社に行きました。しかし、入社式の一週間くらい前に今の「文化工房」とある先輩から電話が来て、「スーパーモーニングという情報番組でADを探してるんだけど、やらない?」と声をかけていただきました。どうしようか迷いましたが、やろうと決め、入社した会社を1か月で辞めさせていただいて、5月1日から文化工房に入りました。

「スーパーモーニング」のADから始め、1年半ほどやった後にディレクターになりました。「スーパーモーニング」という番組は今、月曜～金曜の朝8:00から「テレビ朝日モーニングショー」というのをやっていますが、その前の前の番組ですね。そのあと「モーニングバード」という番組名に変わったのですが、朝の情報番組で12年くらいディレクターとして仕事をしていました。この12年間で僕の今の基本になっていると思っています。

ディレクターとして、カメラマンと一緒に現場へ行って取材して、取材してきたものを持ち帰って自分で構成を考えて原稿を書いて、編集エンジニアと一緒に組んで編集して、そして放送すると。取材から放送まで一貫して全部やっていくというのがこの番組だったので、そこで鍛えられたのかなと思っています。

大体、上司から「今回このニュースを担当して」と言われるんですけど、中には全く興味のないニュースをやってくれと言われることもあります。仕事なのでやりますが、気持ちが乗らないこともあってですね、どうせ仕事をするので

あれば自分がやりたいニュースをやった方がいいと途中で気づきまして、そこからは自分で新聞記事をひたすら探してですね、自分が興味のある記事を探しては企画書に書いて、それをひたすら出して、ということをやりました。最終的には、必ず週3本、多いときは週5本くらいの企画書を出して、何とか自分のやりたいものを作っていくようになりました。

その中で自然と、人物に密着取材してドキュメンタリーにしていくというものにだんだん特化していったかなと思っています。その後、2015年に「報道ステーション」に移りましたが、結局やっていることは同じで、企画書を書いて、出して、という感じです。この時も1シーズン1本くらいは特集を放送していました。年4回くらいですね。その後、2021年の前くらいに「報道ステーション」を離れてプロデューサーを経験したりしながら今年、「ただいま、つなかん」の監督となったというのが簡単な経緯です。

この後は映画の話なので、映画「ただいま、つなかん」ができるまでをお話したいと思います。

きっかけはテレビの特集でした。2012年、「モーニングバード」のディレクターとして働いていた時に、震災一年というタイミングで特集をしようということになり、番組の企画募集がありました。そこで特集をやりたいということで、また新聞記事を地方紙から全国紙までひたすら見てですね、なにか自分が取材したいものがないかなと探しました。その時に見つけたのが、宮城県の河北新報という地元紙の記事です。当時プリントアウトした紙が残ってしまって、それをスキャンして(スライドに)入れたんですけど、これをたまたまネットで見つけました。「御殿のタカラは若い笑顔。ボランティアの集う場」という記事ですね。内容は映画そのままです。女将一代さんのお話で、津波で被災して、自宅を開放して学

生ボランティアの皆さんに使ってもらっているというような記事を偶然見つけて、是非これを取材したいと思ってですね、まずは牡蠣養殖の盛屋水産に電話をして、はじめて一代さんと電話でお話をしました。聞いてみたところ新聞の取材はこれまで入っていたみたいなんですけど、テレビの取材はまだ受けていないとのことだったので、これはいけると思ってまた企画書を書いて、提出して通って、取材に行くことになりました。

初めて取材に入ったのが2012年の2月25日です。その時の取材は映画にも入っているのでわかると思います。この時は大体4日間くらい取材をしていました。学生ボランティアに会ったのは、映画にあったあの4日のシーンですね、あの1グループとしか会っていないのですが、本当に明るくて元気な若者達だなあという印象でした。というのも、映像では伝わってこないかもしれませんが実はすごく寒くてですね、雪もちょっと残っていて、「つなかん」の中もすごく寒かったんです。暖房が全くないので、夜になると底冷えがとんでもなくて、みんなジャンパーを着て震えながら過ごしていますが、そんな中であの若者たちを中心に、わいわいがやがや楽しくやっていて、そこに一代さんと酔っぱらった和享さんが入ってくると場が温まるという環境がずっとあってですね。一代さんは学生ボランティアのことを「地域とつなかんを明るく照らしてくれる福の神だ」ということを言っていました。まさにその通りだなと思って、僕も学生ボランティア達の様子を見ていましたし、周囲の地域の方々もそうやってお迎えしていたように思います。この時取材したものは後ほど持ち帰り2012年の3月7日に放送しました。それが第1回目の放送ですね。

それで、2回目に2015年にこれまた番組内で、震災4年というタイミングで企画募集があったので「つなかん」の民宿完成までを描こうと思って企画書を書いて出して、通って取材

に行って、3月11日に放送しました。2回放送した後しばらく放送する機会がなくて、2016年には震災5年というタイミングで学生ボランティアの同窓会が初めてありますよということを一代さんから聞いて、これは撮影しないと後々後悔すると思っていたんですけども、特に放送の予定はなかったので、自腹で自分のカメラをもって駆けつけて撮影したものがあの映像の中にはいっています。やっさんが素敵なコメントをしてくれていますが、あれは僕が撮影した映像です。本当に行ってよかったなと思っております。

そして2017年に転覆事故がありました。僕は当時「報道ステーション」にいたので大体屋過ぎくらいにニュースを偶然知りまして、当然頭が真っ白になりました。本当かなと、信じられないと思っていて、テレビ朝日に各地方局の映像が集まってくるので、こっそり映像を見ました。自分の目でやっさんの船が転覆している状況を見て、まあ、自分が乗った船で、よくわかりますので、間違いのないという事実を確認しました。どういう状況かと思い、当時「つなかん」に住み込んでいた料理長と話をしたのですが、一代さんは部屋に閉じこもって全く出てこない。誰も会っていないということを当時聞いていました。僕も取材者というかディレクターとして、当然事件・事故が起きたら現場に行くのが鉄則なんですけど、行かなきゃという気持ちはありつつ、なかなか行きにくいといいますが、行けない状況ではありました。

報道ステーションの仕事が月～金で入っていたということもありましたが、現地、つなかんに行ったところで一代さんに会えるかどうかもわからないし、会ったところでなんて声をかけていいのかわからないということがありまして、取材に行くべきなのかずと躊躇しながら過ごしていました。そうしている内に、6月1日に一代さんがFacebookで「つなかんの営業を再開します」と発表

しました。それを見て、「今だったら一代さんに会いに行けるかも」と思って、一代さんに手紙を書きました。2012年からの出会いの経緯とかからですね、取材をしたいという気持ちを手紙に書いて一代さんに送りました。手紙を送って3日後くらいに一代さんから電話がかかってきて、そこで事故の後は一代さんとお話しました。そこで営業再開の話聞き、6月25日に「つなかん」で常連のお客さんに向けてお試し営業をするということで、これは取材に行かなきゃと思って、また自分のカメラを持って、自腹を切って取材に行きました。実はその時の写真が残っていて、これは毎日新聞さんが偶然撮ったものなんですけれども。一代さんすごい笑顔ですけど、一代さんはお客さんとかカメラが来るといつも的一代さんなんですけれども、撮影していないところといいますが、誰もいないところではだいたいぶやせ細ってやつれている状況だったので、改めて事故の大きさを感じた一日だったかなと思っています。

この時の結果を受けて「報道ステーション」に報告というか企画書を出して、報道したいですということを報告して、すぐに採用が決まって、すぐに取材に行って、8月11日に3回目の放送をしました。この時は6分間ほどのVTRだったんですけど、あまりに短すぎたので自分の中で消化不良といいますが、もっとちゃんと伝えたいという気持ちがあったものですから、テレビ朝日のドキュメンタリー番組が土曜日早朝にやっているんですけど、「テレメンタリー」という番組で企画書を出して採用されて、これまた放送になりました。それが2018年の1月18日です。25分くらいのVTRを放送しました。テレビの放送4回ってというのがまずベースでやってきたところです。

ここまでは映画の「え」の字も全く考えていませんでした。テレビの仕事をしていたので、映画は全く考えていなかったのですが、そのあと

に映画の話がありました。2019年に今回のエンドロールに構成として入っていましたが、放送作家で今、日本大学芸術学部で先生をやっております小林 偉(こばやし つよし)さんというんですけれども、その小林さんとの雑談から全てが始まりました。今ドキュメンタリー映画って結構地方局とか番組制作会社が作ってまして、僕らも作れるんじゃないかという話を雑談でして、やるのであればということで僕が継続取材しているものをですね、5、6本企画書を書いて小林さんに見てもらって、どうかねという話をしていく中で、小林さんは「つなかん一択だ」と。僕も「つなかんだったら確かにいけますね」という話をやりましょうってなったんですけれども、やりましょうと言っても何をしたらいいのかわからなくて。僕は映画をつくったことがなかったの、どうやって作るんだろうとか、そもそも映画館でどうやって上映するんだろうとかわからないことだらけで、そこで改めて配給会社の方に連絡をとって話を聞いたり、ドキュメンタリーの映画監督さんに連絡してちょっと話を聞いたりしながら自分で勉強していきました。

僕が勉強したことを会社に伝えて、いつかできたらいいなという気持ちで進めていきました。そんなこんなで2019年の秋くらいにこの話があったんですけれども、もう半年後くらいにコロナ禍に突入しまして。「民宿つなかん」も多分に漏れず大打撃をうけて、売り上げが10分の1になったと聞いていたので、これは取材に行かなきゃと思ったんですけれども、当時、「報道ステーション」の仕事をしていたのでなかなか行けず、「報道ステーション」の方に「もしかしたらゆくゆく映画になるかもしれませんので、やめさせてほしいです」と相談して、会社とも相談したうえで番組を離れまして、11月くらいにコロナ禍の取材のために「つなかん」に入りました。

翌年も2021年、震災から10年というタイミングだったので、また「つなかん」の取材に、これも会社の仕事として取材に入りました。この

ころはまだ映画化することは決まっていなくて、映画にしようと思ったのは去年(2022年)の頭くらいですね。

ストーリーとしてどうかなと考えながら取材をしていたんですけれども、偶然一代さんから東京に行くよという話を聞いたのでこれで終わるかもと思いながらですね、東京の様子を「つなかん」からずーっとくつついて行きました。僕がずっと車を運転してますけど、一代さんも東京に行くのが数年ぶりだったので、一代さんを無事東京の糸井重里さんのイベントに送り届けるという裏ミッションを果たしながら連れて行ったのが、あの取材ですね。

映画にもありましたが、一番最後の一代さんのインタビューは2022の5月です。あれが本当の一番最後の撮影でした。一代さんにラストインタビューを撮らせてくださいとお願いして撮らせてもらったのがあの撮影で、それで取材撮影は終了で、編集して、9月に仮完成しました。仮完成したことをうけて、やっぱりまずは一代さんに見てもらおうということで、10月にDVDを持って「つなかん」に行ってプチ上映会をしました。一代さんが手前にいますが、一代さんと次女のまりさんがマスクしていますけれども、後つなかんスタッフとみんなでつなかんで見てもらいました。一代さんがこの映像を観るっていうのが、テレビ含めて自分が関わってくる特集を見るとするのはとても異例なことで、事故以降、一代さんはそういうニュースとか僕の放送を含めて全く見ていません。当然ながら事故の映像が出てくるので、一代さんは見たくないということで見ていなかったの、今回の映画も「観てほしいですけど観てくれるかな、」と思いながら聞いてみたところ、最初は「考えとく〜」と言われてはぐらかされたんですけど、そのあと2週間後くらいにもう一回電話して聞いたら「いいよ」ということで。皆いるんだったらいいよということで、一代さんに観てもらいました。

この写真は僕が自分で撮ったんですけど、観

るかなあと見守っていたんですけどしっかり観てくれて、エンドロールが出た後は皆が拍手をしてくださったので良かったなと思っています。

そしてこの上映会の1ヶ月後に、学生ボランティアのえま、祐生(さちお)、みっぼ、拓馬さん達に観てもらおうということで、同じ場所ですけど上映会をしました。

その4人衆と一番手前が一代さんの背中ですね、観て、ご家族を含めて観てもらいました。わいわいがやがやですね、本当に昔のホームビデオを観るかのような感じで皆に救われながら。えまさんは取材を受けた経験が豊富なので観ながらですね、「私のインタビューこんなにいる?!」と突っ込まれながら観ていました。

そして、もう一枚写真があって僕にとってはとても大切な、宝物みたいな写真なんですけど、左上から拓馬さんがいて、えまさんがいて、みっぼさん、その右にいるメガネの女性が拓馬さんの奥さんです。学生時代から付き合っているって、結婚されて東京から唐桑に移住した奥様です。その右のメガネの女性とメガネの男性はご夫婦で、男性は福井から、女性の方は岐阜県から唐桑に移住して、唐桑で出会って、結婚されたというお二人ですね。

その右端にいるのが一代さんの次女まりさんの旦那さん、地元の男性です。右にいて一番右端はつなかんのスタッフでふみちゃんって言っています。その隣の男性は子どもを抱えていますけど、みっぼさんの旦那様、地元の男性ですね。その左に祐生さんがいて、その左が次女のまりさんですね。まりさんがいて、一代さんがいて、僕がいると。そして子どもたちはそれぞれの子どもだったり一代さんの孫も入ったりしています。僕を含め、一代さん、そしてつなかんスタッフ、そして移住したもともと学生ボランティアの皆さん、地元の方、そして唐桑生まれの子どもたちと。2時間くらいの映画がこの1枚にぎゅっと凝縮されたような、わたしにとって

は奇跡のような写真なんですけど、映画があったから生まれた写真だなと思って、僕にとってはとても大切な写真になっています。

映画はその後、今年に入って2月24日に仙台公開で、25日に東京で公開して、おかげさまで全国44館で上映して、各地で自主上映会、大学さんとか公民館とかで上映会をさせてもらっています。

僕は2012年から11年間「つなかん」に通い続けていました。改めて、自分の取材日数を数えてみたところ、43日間取材に行っていました。

取材以外にも普通に「つなかん」に泊まりに行っていたので、それを含めると50、60、70日くらい行っていたかなと思っています。ここまで通い続けていた理由って何だろうと考えたところ、大きく2つあったかなと思っています。

一つは皆さん分かるかと思いますが、2017年の転覆事故ですね。この時にそれこそ使命感に近い感じで「つなかん」をみつめ続けなければいけないという思いを固めた瞬間でもありました。

もう一つは、さかのぼって2015年の取材のときかなと思います。この時にもともと学生ボランティアだった若者たちが移住していることを知りました。映画の中でも祐生(さちお)さんだったりとか、車で入ってきたみっぼさんだったりとか、それぞれの紹介シーンがあったと思うのですが、あれは僕が初めて祐生さんとかみっぼさんに会った瞬間でもあります。あの時に彼女たちの存在も知って、移住しているとびっくりして、この2人だけかなと思って聞いてみたらその頃10人くらい移住していますと聞いて、とんでもないことが起きているなということを知りました。「つなかん」に行った方は分かりますけど、海と山に囲まれたごく普通の集落で、その中にある一軒の家を中心に、不思議な、人と人がつながって化学反応と云いますか、起きていることを知ったので、これは取材をし続けなければいけないという風に思ったの

が2015年です。

移住した子達も不思議なもので皆唐桑町に移住してしまっていて、というのは唐桑町って気仙沼の市の中心部から車で30分くらい唐桑半島っていうところに移動したところに皆が住んでおりました。決して便利ではないといいますが、通常に移住するのであればスーパーとか薬局とかが備わっている市の中心部に近いところに移住すると思うんですけども、もともと学生ボランティアだった子達は、なぜか不便なといいますが、便利ではない唐桑町に移住するということで。一代さんとか、一代さんっぽい方がたくさん唐桑にいたので、皆そこに惹きつけられて移住しているのかなと思いました。

それぞれみんな活動的でした、びっくりしたんですけども、祐生さん、みっぽさん、えまさんは”ペンターン女子”というものを自分たちで作って活動し始めていました。

こんなサイトを作ってですね、”ペンターン”の「ペン」は唐桑“半島”ペニンシュラの「ペン」だそうです。「ターン」はIターン、Uターンのターンで、それで「ペンターン女子」といって、HPには十数人メンバーがいるんですけども、皆でいわゆる等身大といいますが、自分達の移住生活をそのまま発信すると。移住生活の楽しさとか、充実しているよということを発信する活動をしていました。それをいろんな新聞とかテレビ、雑誌に取材を受けて、えまさんを中心に取材を受けているという状況がありました。

あと、加藤拓馬さんですね、一般社団法人まるオフィスを作って今は教育関係といっていますが、中学生・高校生の学生さんたちに地域の気仙沼のことを知ってもらおうと、魅力を知ってもらう活動をずっとしています。

それもあって少しずつといいますが、もともと唐桑も過疎化の地と言いますが、なかなか高校を卒業した後は東京に行ってしまうこともあるんですけど、唐桑に残って、気仙沼に残ってですね、気仙沼に帰ってきたりとかいう子たちが

増えてきているかなと思っています。

今後拓馬さんとか、移住してきたもともと学生ボランティアだった子たちがですね、唐桑の、気仙沼の街を少しずつ変えていっているのかなと実感しているところです。

一代さんも福の神という風にもともとと言っていましたが、本当に福の神になっているなということを実感しているところです。

コロナ禍もあってですね、なかなか現地に行くことが難しい時期もありましたが、こうやって彼女達、彼らみたいですね、現地に入るといことは大きいかなと思っています。これは自分にも言い聞かせているんですけど、やっぱり現地に入って地元の空気を知って、いろんな方に会って、発見も大きいと思いますので、今こうやってコロナも多少明けてきているところではあるので、現地に行って、いろんな方に会って、話して、空気を吸うっていう活動をしていくことが大事なんじゃないかなということを改めて思っていること最近です。

もともと日本財団ボランティアセンターでえまさんとか含めて行っていましたが、今ボランティアセンターも改めて気仙沼との繋がりをもう一回見直そうということで、今年から映画を機にまた学生さんたちを唐桑、気仙沼に連れて行ってですね、活動をまた再開したそうです。これもまたこの映画ができて、また現地に行くことに繋がってですね、僕としてはとても映画を作った甲斐があったなという風に今思っています。

そんなこんなで時間になりました。

僕、今日は終わった後もしばらくいますし、この後懇親会もあるので、感想等含めてもし何かありましたらお話を聞かせていただけるといいなと思います。

あと、Twitter(現:X)、Instagramなどやっておりますので、また感想を聞かせていただけると嬉しいです。

ありがとうございます。



一応、補足するとですね、これ、一代さんは久慈市出身なので、8月に一代さんの地元で上映会があったんです。なので、一代さんと僕とで上映会に行く途中に撮った写真ですね。一代さんも数年ぶりに地元に戻ったということで、これも映画があったからこそ帰ることになったのかなと思っています。つなかんは今、土日はほぼ満室と聞いています。平日は結構空いているそうなので、つなかに皆さん行ってほしいなと思います。1泊確か1万ちょっとくらいですが、1泊2日2食で泊られます。もれなく一代さんがついてくるので、皆さんぜひつなかに泊まりに行ってくださいなと思います。

東京から新幹線と車で4時間くらいかな。予約の電話をすると大体一代さんが出てくれますので、ぜひ予約から楽しんでいただければいいなと思っています。

■アフタートーク

パネリスト

- 風間 研一(映画監督)
- 不二山 七海(社会学部 メディア社会学科 4年)
- 和田 夏海(コミュニティ福祉学部 福祉学科 3年)

ファシリテーター

- 齋藤 元気(ボランティアセンター ボランティアコーディネーター)



齋藤: ここからアフタートークに移っていきなさいと思います。

ちなみに、先ほど話題にあがっていた根岸えまさんは、10年前に開催したボランティアセンター設立10周年シンポジウムに出ていただいております。ボランティア活動を行う立教生の経済的な支援を行う「ポール・ラッシュ博士記念奨学金」にも採用され、50万円を獲得し、現地で活動していたということで、ボランティアセンターとも深いつながりのある方です。

それでは、まず始めに自己紹介したいと思います。私は、立教大学ボランティアセンターでボランティアコーディネーターをしております齋藤と申します。よろしくお願いいたします。

続いて学生の二人にも自己紹介をお願いしたいのですが、監督からご要望がありまして、二人共、「つなかん」に宿泊したことがあるということで、どのような経緯で宿泊したのかと実際に泊まってみてどうだったかを合わせてお聞きしたいです。自己紹介と併せて、「つなかん」でのエピソードをお話してください。

和田: 和田夏海です。私が代表を務めていた「立教Frontiers」というサークルが、「つなかん」とつながりを持っており、毎年行っていたのですが、そのサークルのつながりで、2年前、2021年の冬に宿泊

しました。

私は1年生の時に詳細を知らずに行ったのですが、入ったときに一代さんがすぐ「おかえり」と言ってくれたのがすごく印象に残っています。また、相席させていただいたりとかびっくりすることがいっぱいあってすごく楽しかった思い出があります。

不二山: 不二山七海です。この映画をみて「一代さんに会ってお話をしてみたい」「つなかんを実際にみてみたいという思い」があったことがつなかんに行った経緯ではあるのですが、もともと3年生の時(2022年)の9月に社会学部の田北康成先生の講義で大槌町を訪れていて、田北先生から「陸前高田とか気仙沼もぜひ行ってみな」という声をかけられていました。今年の冬、夏、秋と陸前高田に行きましたが、気仙沼は経由地のため、全然降りていなかったっていうのもあって、気仙沼を見つつ、唐桑や「つなかん」の周りを見つつという感じで行きました。最初は行き方が分からず、タクシーに乗り、山周りで行ったのですが、到着後、裏から一代さんが来て「なにで来たの?」と聞かれて、「タクシーでできました」と言ったら、「なんでタクシーできたの?!」みたいな。すごく驚かれて。「とにかく疲れたでしょう。入りな!」と言われて、荷物をすぐに持ってきて、そのまま夕飯を食べる場所で「あったまりな」と言われて。

一代さんの高校の恩師の方、ご夫妻が来ていらっしゃって、その方とお話であたりとか、初めましての方しかない場所でありながらも、数年ぶりに親戚が集まって一緒に夕食を食べているみたいな、そんな温かい雰囲気すごく印象的だったなと思います。

風間: つなかんに行った方は知っていると思いますが、基本皆初対面なのに、夕飯を食べた後くらいにはなぜかみんな仲良くなって、お酒を飲みながらわいわい喋って。プライベートな話も自然として、皆の色恋沙汰まで知っちゃみたい、不思議な空間です。そして翌朝帰る時は皆で連絡先交換して、「また会いましょう」と言って帰っていくと。一代さんも「行ってらっしゃい~!」と送ってくれて、それで「また帰ってきます~!」と言いながらまた帰ってくるというのがつなかんのおなじみの風景です。

僕はよく行ってますけど、毎回いろんな方とお会いして、毎回初対面でまた仲良くなって、ということを繰り返していくので、不思議な環境ですね。それは当然一代さんがいるから成立するわけですが、ぜひつなかんに行ってみてください。

齋藤: 最初は緊張しますが時間がたつと緊張がなくなってって、溶け込むような感じになっていきますよね。

風間: 不思議ですね。

齋藤: そうですね。

和田さんと不二山さんには、今日映画を観てみてどのようなことを感じたのかを含めて、監督にご質問いただければと思います。不二山さんがこの映画を見たのは今回で3回目、リピーターということなのであえて残しておいて、先に今日初めて観た和田さんから感想と監督に質問したいことをお聞きしたいと思います。

和田: 私が一代さんにお会いしたのが2022年で、その時はすごく明るい印象が強かったのですが、映画を通して私が知らな

い一代さんの一面を知ることができ、改めてもう一度つなかんに行って一代さんにお会いしたいなって気持ちになった映画でした。

映画を観ていて学生ボランティアの方と一代さんの関係がすごく特別なものに見えましたが、10年間の中で風間さんからその関係性はどのように見えていたのかなとか、どのように変わっていったのかを聞きたいなと思いました。

風間: そんなには変わっていないというか、皆あだ名で呼び合う関係性です。変わっていないものの、やっぱりどちらかというに移住した方たちが10年経って、もともと移住者としてやってきたんですけど、だんだん地元民になっていくといいますかね、というのは僕も見ていると少しずつ、特にここ2、3年くらいかな、大きくなってきたかな。

本人たちも30歳になったので、少しずつ移住者から地元民に変わってきている。ただやっぱりよそ者だからこそわかることがあることも自分たちで分かっているので、移住者の目線は常に意識しつつも、やっぱり地元のじいちゃんばあちゃん含めて過ごしているので、だんだん地元民になっていく。葛藤とは違うんですけど、そういうことは移住した方達に特に感じるかな。

一代さんはそこにうまくサポートというかな、関係性は変わっていないんですけど、移住した方達の立場が変わっていくにつれて、一代さんも変わっていくという印象を持っています。

和田: 唐桑は東京と違って出入りが激しい場所ではないと思いますが、移住した学生たちの悩みとかに一代さん達はどのよう

に寄り添っていましたか？

風間: 家が近いんですよ。皆思い立った時には「つなかん」に行って一代さんと話をするっていうのがずっと、かれこれ移住してから変わっていないと思います。

だんだん、「つなかん」に相談に行く機会は減ってきていると思いますが、関係性は変わっていないと思いますね。

和田: 映画を観ていて、長い関係性がずっと続いていくのはすごいことだなと思っていて、そういう話が聞けて良かったです。

齋藤: ボランティアとかこの地域に全くゆかりがないところから入っていくわけですが、移住してすぐはある意味、よそ者に見える部分はあると思うんですね。そこからどのように地元民と認められていったのかというところは、風間監督から見ているかがですか？

風間: 今考えてみると、皆さんのお子さんができたことが1番大きかったと思います。皆子どもが生まれだしたのが2、3年くらい前からなんですね。生まれた子ども達っていうのは昔ながらと言いますか、地域のおじいちゃんおばあちゃん達が面倒みるんですよ。本人達は仕事に行ったりとかがあるので。そのような関わりの中で、子ども中心にまたコミュニティが生まれていく、その中で自然とお母さん、お父さんとして、その地域・コミュニティにまた違う形で入っていくことで、たぶん本人達の中でも意識が変わっていつているのかなという今は感じますね。

齋藤: 映画の冒頭で一代さんが学生ボランティアを「自分達の子もだ」と言っていた

ところから、自分の子ども達が地域に生まれてどんどん地元民になっていくということにつながりを感じたのですが。

風間: 一代さんはそんなに地元唐桑・気仙沼にずっといてほしいって気持ちを持っていないとか。本人達が違うところに行きたいとか、興味があるとかだったらそれはもう行きなさいというのが一代さんの考え方なので。唐桑でずっと生きていきなさいという考えは全く持っていないかなと思うんですけど。こう自然と溶け込んで、本人達も「私達はずっと唐桑にいるわけじゃないから」ってよく言ってるんですけど、言っているけど、まあいそいだなというのはなんとなく感じます。ここ最近は。

齋藤: ありがとうございます。不二山さんはいかがですか？

不二山: 一番最初に観た時は、ここまで人と人の関わり、繋がり大きさとか、その関わりによって新たに生まれた繋がりとか、化学反応を起こして変化する様子がリアルに描かれているのが印象深かったです。2回観たあとに改めてつなかんに行って一代さんとお会いして、映画の中も話していましたが、今を楽しむということであったりとか、それでもやっぱり前を向いて生きていかないといけないよねとお話しされていたりとか、一代さんの一つひとつの言葉がすごく刺さるなということ、今日観て感じました。

私はメディア社会学科で4年間学んでいく中で、ジャーナリズム的なところや、ドキュメンタリー制作の部分、伝えるということ、学んできたこともあり、どのような距離感で取材・制作をして

きたのかや、制作で心掛けていたこととか、監督の中での変化があったところとかを伺えたらいいなと思います。

風間: 取材者と取材対象者の距離感というのは、取材する者にとって必ず感じるテーマではあります。「つなかん」に泊まったりもして、当然仲良くなっていくんですけど、必ずどこかに客観的な視点というのは残して過ごしています。なので、多分永遠に普通のお客さんにはなれないと思うんですけど、それはそれで僕でもあるし。一代さんは僕のことをストーカーと言っているんですけど、僕がつなかん「ただいま〜!」って行くと、「おかえり〜!」「お、来た!!ストーカー!!」と言われるのが毎回のやり取りなんです。それってある種、一代さんの僕に対しての距離感といえますか、感覚に近いと思うんですけど、お互いいろんな場面をずっと一緒に過ごしてきたので、阿吽の呼吸というところもあると思います。

インタビューという意味で1番大変だったのは、事故の後の最初のインタビューかなと思いますね。その時はインタビュー前に一代さんに「僕も取材者として聞きたくないことを聞きますのでよろしく願います」ということを言いました。事故の1週間くらい後のことです。逆にこういった立場だからこそ聞きづらいことを聞けるんですね。そんなにずけずけは聞かれないですし、もちろん色々気を遣いながら聞けるんですけど、それは僕だから聞けるし。一代さんも喋りながら少しずつ自分の中の心の整理をしていく。その相手が僕だったという感じで。言葉で表現しにくいんですけど、僕と一代さんの独特の呼吸というのは毎回あるかなと思っています。

不二山: ありがとうございます。「つなかん」に宿泊にした際、そこにいた方々に私を紹介してくださる時があったのですが、「え～なんか風間っちの後輩来たよ!」って言われて。

どのような関係性かという話になった時には、「まあねえ、、10年もね、密着されればねえ、、」って苦笑されてたのが記憶に残っています。

少し話がずれてしまうのですが、ドキュメンタリー映画ということで語りを入れているじゃないですか。その語りを入れるポイントや語る言葉、どのように編集されているのかを含めて、どのように制作されていましたか?

風間: ナレーションは当然僕が原稿を書いています。映画の時もどのようなスタンスでナレーションを付けるか考えるのは僕でしたが、構成で入ってくれた作家の小林さんとも相談しながらやっていました。ドキュメンタリーなので、自分の主観的な目線でナレーションを入れていこうねっていうことは決めて進めていました。最終的に読んだのは渡辺謙さんです。ナレーションを撮る前に原稿渡して、読んでもらって、当日初めてお会いして話したんですけれど、私が渡した原稿に赤ペンが入っていて、謙さんが自分で直していました。直すと言っても内容を変えるのではなくて、自分の気持ちがのっかりやすいように直していってらっしゃって。事故の前の学生ボランティアの最初の同窓会の時にやすさんが素敵な話をされていたところは、特に自分の気持ちをのせたかったのか直されていました。僕とも相談しながらやっていたのがあのナレーション、語りです。でもドキュメンタリーなので、ナレーションは極力最小限、余計なことは言わずに補足しなけ

ればいけないことだけを淡々と入れていくことだけは意識してやっていました。

不二山: ありがとうございます。

齋藤: 時間の都合上一つくらいかなと思うんですけど、質問がありましたら会場からお伺いできればと思いますけれどもいかがでしょうか?もし追加で質問があれば、残り一つくらいですかね。

和田: 私が1年生の時に一代さんと会った時は明るい印象がすごく強かったんですけど、10年間ずっと一緒にいて一代さんの魅力はどのように感じていますか?

風間: 天性のセンスだと思うんですけど、基本何も考えない、何も考えないと言ったら怒られちゃうか、、思いつきで動いて、思いつきで発言する方なんですけれど、なぜか言葉に力があるんですよね。女将の仕事も当然やったことがなくて。もともと牡蠣の養殖の方なんですよ。でも自然と女将業はやっていて独特の不思議なセンスというか。それもやっぱり、思いつきで発言したり思いつきで行動したりする全てが光を放っているだろうなと思っているんですよね。それもあって皆一代さんに惹きつけられて皆また「つなかん」に行くんだろうなと思いますけれど。それは僕が最初会った時から今も変わらずで、それが魅力なのかな。思いつきなので大変なことはありますけれど、、

齋藤: 大変なことがありながらもいろんな人を惹き寄せ、巻き込んでいく力がありますね。ありがとうございます。最後、監督には講演会も含めてこのアフタートークの感想をお聞きできればなと思います。お

二人はご自身のサークルの活動の一環として現地に行って宿泊したり、社会学部ということで自分の学びと重ね合わせたりする場面があったように思いますが、今回の映画をご覧になって、改めて自分自身と重ねて考えたこと、今後考えていきたいことを、お聞きしたいと思いますが、和田さんからお願いできますでしょうか？

和田： 今回の映画を通じて、ボランティアからここまでの繋がりができるってすごいことだなんて改めて感じました。私自身いろんなボランティアに行かせていただいているんですけども、こういう一つの大きな繋がりにもなるんだなって、映画の中の学生ボランティアの方を見て思ったので、ボランティアに行った時の単発での繋がりでだけでなく、これからも繋がっていくかもしれない方々との繋がりを大事にしていきたいなと思いました。後輩もたくさんいて、1年生とかがまたボランティアを通して繋がっていくと思うので、そういう人達にも大切にできる環境をたくさん提供できたらいいなと思いました。ありがとうございました。

不二山： 今の和田さんの話にもあったように、人との繋がりがっていうのをすごく大きく感じていて、この1年くらいを通して大槌町、陸前高田、気仙沼っていう風に関わっていく中で、その人との繋がりを継続していきたいです。また、継続していく中で見えてくるものがあることやその変化も映画を通して感じましたし、自分でも今後、実際動けていないサークルではありますが、後輩たちを連れて陸前高田・気仙沼あたりを一緒に回ったり、また新たな発見をしたり、地域の人と関わったりしたいと強く思いました。

風間： 改めまして今日はどうもありがとうございました。立教大学を卒業して、まさかこういう形で自分の母校にいるとは思っていませんでした。しかもこっち側にいるのがすごいなと思って不思議なものだなと思いつつ過ごしていました。

こういった方々と一緒にお話が出来て、お二人ともね、実際行動に動いていると思いますけれども、せっかく学生ボランティア、学生さんの立場の間で色々飛び込める環境にいますから。気持ちさえあれば現地に行けると思うので、今の学生さんとかボランティアの方達には、まずはせっかくなので気仙沼に行ってみてほしいなと思います。なんなら「つなかん」に行ってもらって、また違う経験とか環境とかから影響を受けることもあると思います。まあ騙されたという変ですけど、まず行ってみるというのが大事なと改めて思いました。

僕も引き続きつなかんに行かなければいけないなということを、毎回こういうことをやる度に思っています。実はまた今月来月あたりにも一代さんに会いに行こうかなと思っています。改めまして本日はありがとうございました。

齋藤： ありがとうございます。僕も今年3月に「つなかん」に宿泊したのですが、そこで一代さんに「ちょっと、立教でもっと宣伝しなさいよ!!」って言われてきたので、今回のような機会を持って、ほっとしています。立教大学は、陸前高田市と協定を結んで陸前高田グローバルキャンパスも設置していますし、大学内だけでなく学外にも学びの場があるという環境をすごく大切にしております。ボランティア活動自体は誰かに評価されるというものではないからこそ、自分自身の気持ちや意志で

現場に赴き、現地の人と接することができますし、その中で様々な人に巻き込まれながら自分の人生の一部にしていくというところが醍醐味でもあります。今回のような機会をいただいて、改めてそういった魅力・価値についても考えられたように思いますし、ボランティアセンターがさらに先の10年を歩み出すうえで、これからもより良い環境をつくっていけたらと思います。

今回ご登壇いただきました和田さん、不二山さん、そして風間監督、ありがとうございました。

■プロフィール

風間 研一

(「ただいま、つなかん」監督)

1977年(12月26日)生まれ。神奈川県横浜市出身。神奈川県立柏陽高等学校卒→立教大学理学部化学科卒。化学系専門商社に入社後、テレビ情報番組のADを経て文化工房へ入社。以来、テレビの各情報・報道番組に出向のかたちで在籍しながら主に企画特集を制作し、年3～4本の企画特集を制作・放送。2019年、自ら希望して報道番組の出向から異動し、ディレクター・プロデューサーとして自社制作番組などに携わる。企画制作部所属。

これまでの受賞歴は、自閉症の芸術家を追った「作品は語る」(2012年)、民宿つなかんの料理長(当時)を追った「僕は今ここにいる」(2016年)で、ともに民教協スペシャル優秀企画賞。本作映画初監督。

不二山 七海

(社会学部メディア社会学科4年/立教大学フレスコボールサークル 代表)

大学入学時より「子どもの居場所づくり」や

「まちづくり」等をテーマとした多岐にわたる活動に携わっており、2023年春「陸前高田イタルトコロ大学」に参加。「気仙辺辺(あだりほどり)の春を探して」のイベントでは、気仙地方取材しその魅力を伝えるポスターを作成、最優秀賞を受賞した(Three-S+不二山チーム)。また同プロジェクトでの出会いをきっかけとして、体育会系サークル「立教大学フレスコボールサークル」を立ち上げ、フレスコボールをとおした継続的な陸前高田との交流活動に取り組んでいる。

和田 夏海

(コミュニティ福祉学部福祉学科3年/立教Frontiers 前代表)

宮城県気仙沼市唐桑町や岩手県陸前高田市を主なフィールドとして活動している「東日本大震災復興支援団体 立教Frontiers」の前代表。同団体の活動を通して、三陸沿岸地域を訪れ復興状況の視察や現地の方々との交流を深めるツアーを企画・運営、地元住民から寄せられたニーズに対して取り組む「陸前高田イタルトコロ大学」公式プロジェクトへの参加など、幅広く活動を行ってきた。2023年春の活動の際には「つなかん」に宿泊している。

齋藤 元気

(立教大学ボランティアセンターボランティアコーディネーター)

高校3年生の時に実家のある宮城県で東日本大震災を経験。大学進学のため上京後、「新たな被災地を生み出さないため」に、震災伝承や地域住民や行政を巻き込んだ防災・減災活動に取り組む。そんな学生時代の経験から、現在はボランティア活動を通して大学生が社会の創り手になれるようなコーディネーションを実践している。東京都公立小学校の教員、他大学でのボランティアコーディネーターを経て現職。認定NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会の運営委員なども担う。

